

新留学生出発前 オリエンテーションを開催

6月5日(日)、2022年度、新留学生のための「出発前オリエンテーション」をZoom方式で行いました。同窓会からは藤村建夫氏、高瀬千賀子氏、関根真杜氏、大和田匠氏が講師として参加し、32名の新留学生が参加しました。



オリエンテーションは、同窓会が事前に現在の留学生の協力を得てアップデートをした「2022年版、サセックス大学留学ハンドブック」の以下の主要項目に従って、講師の説明が行われ、続いて、活発な質疑応答が行われました。

1. ロンドンから大学への交通, Brightonの町及び住宅(大学の寮かアパート、シェアハウス・ルームなど)(関根)
2. 保健と日常生活(NHS、買物、寮生活、コロナ事情等)(大和田)
3. 効果的、効率的な学業への取り組み(ペーパーの書き方など)(藤村、高瀬、関根)
4. 大学利用できるアドバイスシステム
5. 財政その他(関根)
6. 質疑応答



新留学生からは、住居選定の問題、VISA取得にかかる手続きの心配、家族帯同の場合の子供の保育園の問題、就活の時期等に関する質問がありました。他方、大和田講師は現在留学中のため、最近の情報が豊富で、生活必需品の購入場所、インフレによる生活費の上昇、コロナとの共存による対面に代わるオンライン登録等への変更など有益な情報が提供されました。

「開発問題とSDGsのフレームワーク」セミナーを開催

学士での勉強で国際開発のことを勉強していない留学生のための「開発問題とSDGsのフレームワーク」セミナーを、6月19日(日)に開催しました。20人の参加がありました。

過去に国際開発を勉強した経験がない新留学生が多い割には、半数以上の人達が途上国に行った経験を持っていました。国際開発の関連課題を勉強するに当たっては、途上国に行ったことがある経験はやはり、大きな助けになるかと思われます。

最初に、藤村講師がこのセミナーを提供する趣旨を説明しました。次いで、「開発問題のフレームワーク」のテーマの意味するところを、途上国が持つ「政治、経済、社会と環境」の複雑な要素が相互に関わっていることだと説明し、続いてそれら政治、経済、社会、環境分野の個別具体的な問題・課題とはどんなものかについて、解説しました。

次に、高瀬講師が「SDGs」が策定されるに至った長い国連を中心とした国際社会の努力の歴史的過程を紹介し、MDGsの後を継いで策定されたSDGsのユニークな特徴について、解説しました。



新留学生からは、17の目標に対する反対意見の有無や国連のHigh Level Political ForumとCOP26との違いについて、といった質問が寄せられました。

最後に藤村講師より、「開発問題のフレームワーク」に関する12の問題の解答と共に、個人的経験にもとづく「人生を左右する3つの要素」と「大学で身に付けるべき3つの能力：専門的能力、運営管理能力、個性的能力」について、紹介しました。

キャンパス便り (2021年度生)



ハウスメイトの誕生日に開催したサッカー大会にて (後列右端が筆者)

嶋吉 慧 (しまよし さとし)

MSc Science and Technology Policy, Science Policy Research Unit (SPRU) 2021年入学

初めまして。 SPRUにて科学技術政策修士を専修しております。嶋吉慧と申します。

留学の背景

科学技術と社会の関わりへの興味から学部時代は科学技術社会論 (STS) と呼ばれる分野を専攻していました。卒業後、社会の最前線での科学技術の活用のされ方を知りたいと思い、経営コンサルティング企業に就職。官民での技術活用の現場を見るうちに、科学技術の社会実装は企業だけで解決できず、政策等の仕組みとしてのアプローチが必要ではないかと感じ、科学技術×政策の分野での大学院進学を検討。学部の指導教官の先生を通じてSPRUを知り、アカデミアに留まらず実際の政策決定と紐づくプロジェクトに従事する教授陣が多いことにも惹かれ進学しました。

学業から

科学技術イノベーション101の授業から、AI政策などの専門的な授業、R言語でのテキスト分析まで、1年間の短期間ながら幅広い授業を履修しました。教授陣と学生と距離の近さも魅力の一つで、修論のテーマや関連する専門家の紹介からキャリア相談まで親身に相談に乗ってもらいました。教授主催でのキャンパスからLewesへのハイキングや、キャンパスのpubで話し込むことも。また、教授間での主義主張の違いについて、Andy Stirling教授が「PluralityこそがSPRUらしさ」と語っていたことも印象的でした。暫定的でも答えを出すことを求められるコンサルティングと、一意の答えがないことを受け止め時間をかけてでも丁寧に思考を深めようとするアカデミアの違いを鮮やかに実感した瞬間でした。

暮らしの中から

生活面では、リベラルかつ外国人に優しいBrightonの街の住みやすさを存分に享受しました。市内の一軒家での留学生10人での暮らしからは、「多様性」が持つ難しさ面白さを学びました。コロナ感染時の隔離のルールを巡る話し合いで、多様な関係者を巻き込んで開発など社会課題を解決する前にミニチュア版の社会であるハウスコミュニティの課題も解決できるようにならないと、と話し合ったことも良い思い出です。

今後

将来的にはAIなどの新興技術のルール作りに関わりたいて考えています。具体的な関わり方は検討中ですが、入学当初に言われた「Masterは専門家になる場所ではなく、そのなり方を教える場所。修了後にどう学び続けるかが、在籍中の学び以上に重要」との言葉を噛み締め、どこに行こうとも謙虚かつ堅実に学び続けられればと思っています。

終わりに

貴重な寄稿の機会をありがとうございました。ご質問・感想等ございましたら、Linked inもしくは以下アドレスまでご連絡いただけますと幸いです。
satoshi Shimayoshi@gmail.com



皆様からの積極的な投稿のお願い

同窓会では、会員の皆様からの、楽しい思い出や出来事、エピソードなど興味深いお話しのご寄稿をお待ちしています。

また、同窓会活動やニュースレターに対するご意見等ございましたら、こちらのメールアドレス (makoz.kitchen@gmail.com) までご連絡ください。

Alumni Now!

生駒知基 (いこま ともし)

MA in Development Studies (2018-2019)

現職：三菱商事



こんにちは、生駒知基と申します。サセックス時代にはIDSで開発学を学んでいました。現在は総合商社の海外戦略を立てる部署にいます。拙文ではありますが、私のサセックスへの留学と、現在の仕事の様子や今後の展望について書いて行きます。

サセックスへの留学

「なぜサセックスで開発学を勉強したのか？開発学とは何なのか？」

サセックスで開発学を勉強した人であれば何度となく聞かれる質問ですが、これほど本質的で、人によって答えが異なり、そして難しい質問もなかなか無いように思います。私の場合の「なぜサセックスで開発学？」に対する回答は、将来的に国連・国際機関で働きたいと考えていたため、世界的にも開発学分野の知名度が高く、ある意味「国際協力のキャリアにおける登竜門」であるサセックスで学んでみたいと考えたからです。

「開発学とは何か？」については大学院で学んでいた時にも一言で言い表せる言葉は見つからず、大学院卒業後民間で数年間過ごした今となっては一層難しくなっているのですが、頑張っ自分なりの答えを絞り出すのであれば「あらゆる種類の不平等に対して、学際的なアプローチを用いて認識・分析・対応を行う学問」ということになるのかと思います。貧困問題の例が分かりやすいですが、あらゆる種類の不平等に対して、政治学、経済学、社会学、人類学、教育学、農学... etcといった多様な学問の切り口から捉えようとするのが開発学の本質であり、貧困問題やジェンダー問題、気候変動といった多数のテーマを内包する理由もそこにあるように思います。

私はサセックスで「Power and Social Perspective in Development」「Sustainability and Policy Processes」「Health and Development」の授業を履修していました。いずれのコースも面白かったのですが、特に興味深かつ

たのはPower and Social Perspectiveの授業のグループワークです。ブライトン市内で移民・難民の方が集うコミュニティカフェに数ヶ月密着しました。そうした人々が自国の料理を振る舞うことで、自分自身や自国に対して誇りを持つ(エンパワーされる)様子を目の当たりにし、それをPower Analysisの理論と絡めながらグループエッセイに纏めました。不平等や力関係はコミュニティレベルから存在し、そして必ずしも目に見えるわけではないですが、自国の料理(自らのアイデンティティ)が認められることで、不平等や力関係が少しずつ変化/瓦解する様子を参加者の誇らしそうな顔から感じました。

総合商社へ

大学院修了後は三菱商事に就職し、海外戦略を立てる部署で欧州を担当しています。ここ数年のメインテーマはBREXIT後にどのようにEUをフォローするかということで、正直なところ直接的にサセックスで学んだ内容が生きているかは疑問ですが、新しい経験だと捉えて日々頑張っています。

BREXITを経てEUを大陸側からフォローするべく、今年度(2022年度)から弊社はブリュッセルにオフィスを構え始めました。昨今のサステナビリティの潮流の中、規制・補助金主導で進むEUの脱炭素の動向は会社のビジネスにも大きな影響を与えることから、しっかりとオフィスを置いて情報収集を行おうという考えです。

私も同オフィスの活動をサポートするべく、長期出張の形で2ヶ月間ブリュッセルへ行ってきました。セミナーやシンポジウムで欧州委員会や欧州議会の方の話を聞くと、新型コロナやロシア・ウクライナ情勢を経てもEUの脱炭素戦略は変わらず、むしろ何が何でもこれを契機にEUのエネルギー構造を転換するという強い意志を感じます。一方で、エネルギー価格の高騰の中、安価な化石燃料への需要が高まっているのも事実であり、どちらに転ぶかをしっかりと見極めようとする(そしていち早く変化の兆しを察知し、利潤を得ようとする)のが弊社を含むビジネス業界の動向であるように思います。

今後の展望

前述の通り、私は将来的に国連・国際機関で働きたいと考えており、どこかのタイミングでキャリアチェンジを行いたいと考えています。その時までには十分なスキルや知識、経験を得られるよう、まずは今の会社で一生懸命に頑張りたいです。



サセックス・サロン

5月のサセックスサロン：

“From Seed to Cup”

スペシャルティコーヒーの楽しみ方

開催日：2022年5月21日（土）

時間：東京時間の午後8時—9時半

場所：ZOOM方式

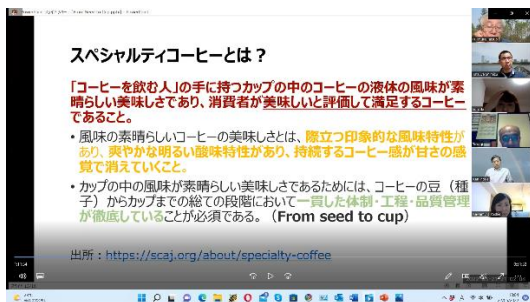
スピーカー：黒田史穂子さん

(MA Gender and Development, 2003年卒)



このところ、コロナ感染症蔓延のため、お休みしていたサセックスサロンが開催されました。今回は、黒田史穂子さんが、長年に渡って蓄積されたご経験をもとに「種子からカップまで：スペシャルティコーヒーの楽しみ方」と題して、コーヒーが栽培されて、抽出されるまでのプロセスと共に、どのようにおいしさが評価されるのかについて解説していただきました。当日、都合が悪くなった人、後から参加の人がいて、10名の参加者がありました。

最初に参加者がお互いを知りあうために自己紹介をして、その中で「現在飲んでいるコーヒーを紹介した後、コーヒーについて知りたい疑問を述べました。続いて黒田さんが自己紹介の後、コーヒーの生産過程から抽出にいたる過程を詳しく説明されました。



お話しの骨子は以下のとおりです：

1. コーヒーとは？
2. コーヒー豆の品種の系統
3. コーヒーの栽培地域

4. コーヒーになるまで
5. コーヒー生豆の格付例
6. スペシャルティコーヒー誕生の背景
7. 評価方式の転換
8. From Seed to Cupの意味するところ
9. Cup of Excellenceの導入
10. スペシャルティコーヒーとは？
11. コーヒー豆の味の違いを作り出す要因
12. コーヒーカルチャーの波

参加者からはいろいろな質問があり、サロンは盛り上がりました。

- Q1: コーヒーは老化に良いか？どのコーヒーが良いか？
Q2: 入れ方で味が違うのか？
Q3: おいしいコーヒーはどうやって作れるか？
Q4: 買った豆を自分で挽いて作るのと買った粉末をフィルターで濾す方とでは、どちらがおいしいか？
Q5: 古くなったコーヒーをおいしくいただくには？
Q7: 水だしコーヒーをおいしく作る方法は？
Q8: 「の」の字にお湯を注ぐとおいしくなるか？
Q9: コーヒーの付加価値を高めて輸出する方法は？
Q10: コーヒーの Fair Trade での取引動向は？

これらの質問に、黒田さんから夫々の確な回答がありました。結論としては、以下のようにすると、おいしいコーヒーが飲めそうです。

1. 焙煎されて間もないコーヒー豆を買ってきて、自分の手で挽いて粉末をつくり、速やかに賞味する。
2. ハンドドリップでコーヒーを抽出する場合は、ペーパーフィルターに、細口ポットのお湯をその中心から小さな「の」字を描くように、ペーパーフィルターにかからない範囲で万遍なくお湯が行き渡るように注ぐ。

コーヒー豆の味の違いを作り出す要因は以下のようですが、湿度、光、高温を避け、冷暗所などで保管。焙煎後豆のままの状態でも1か月、挽いた状態でも2週間以内を目安に賞味しましょう。

- 品種ごとに風味特性がある。
- 同品種でもテロワールにより味が異なる。
- 精選方法の違いにより味が変化する。
- 同じ生豆でも焙煎度により味が変化する。
- 同じ焙煎豆でも抽出方法により味が変化する。
- 同じ焙煎豆でも保管方法により味が変化する。



サセックスサロンは、会員相互の親睦を深め、教養を広げ、深める交流のための会員広場です。

「世界に貢献する日本人30」選出

～オンラインサロン「国際協力サロン」運営～

田才 諒哉

IDS MA Development Studies (2019年卒)



国際協力サロンにより開催したプロジェクト「VANART (Vanish+Art)」で原宿で環境問題啓発のアートイベントを実施。メキシコ人アーティストを日本に招待し、ライブペインティングを行った際の様子。

2019年にInstitute of Development StudiesのMA Development Studiesを卒業しました田才諒哉です。昨年、ニューズウィーク日本版「世界に貢献する日本人30」に選出いただきました。(詳細はこちらの記事をご覧ください。)

<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2022/01/2-402.php> 今回は、私が運営しているオンラインサロン「国際協力サロン」についてご紹介させていただきます。

2018年10月、サセックス大学在籍中にオンラインサロン「国際協力サロン」を立ち上げました。ちょうどこの頃、オンラインサロンというものがアーリーアダプター層を中心に注目を集めつつあった一方、国際協力をテーマにしたオンラインサロンは存在していなかったため、まずはやってみようという気持ちでスタートしました。新型コロナウイルス感染症拡大以降、Zoomなどを使ったオンライン会議は当たり前のように行われるようになりましたが、当時はまだイベントをオンラインで開催するということは多くはありませんでした。特に、国際協力に関するイベントは東京のような大都市で対面開催というケースが多く、地方在住の学生など、国際協力に関心があってもなかなか必要な情報、人的ネットワークにアクセスできないという課題があったと思います。

そうした地理的・時間的課題を克服するため、国際協力サロンでは2018年からオンラインでの勉強会や交流会を中心に活動しながらも、カンボジアやタンザニアへのスタディツアー、アートを通じて社会課題を訴えるイベントなど、オフラインも組み合わせながら多岐に渡る活動を続けてきました。現在は144名のメンバーが所属しており、20代が中心ですが、一番下は高校生から上は50代の方まで、所属先も学生からNGO、国際機関、民間企業、政府系機関、フリーランス、主夫／主婦など幅広い世代とバックグラウンドをもった方々が集まっています。

今後も定期的なオンラインでの勉強会は継続しつつ、昨年からはじめた「ユース世代でつくるSDGsのその先」をテーマにしたプロジェクト「Beyond SDGs」(詳細はこちらをご覧ください。)

[\(https://kk-salon.com/SDGs/\)](https://kk-salon.com/SDGs/)

国際協力に関する知識やスキルのインプットだけでなく、実際に社会を変えるアクションまで繋げられるような活動を続けていきたいと思っています。活動に関心のある方がいれば、ぜひご連絡いただけると嬉しいです。

■国際協力サロンについて

<https://kk-salon.com/>

編集後記

今回のニューズレターを担当しました2019年卒の関根真杜と申します。ご多忙の中、寄稿頂きました皆様には大変感謝をしております。

2022年もあと残すところ10日あまりになりました。世界的なコロナ感染症の拡大に加えて、2月に始まったウクライナ戦争が世界中のエネルギー危機、食糧不足、インフレーションを引き起こし、経済・社会に深刻な影響を与えています。新年にはこれらの深刻な事態が少しでも改善されることを祈ります。

